# ウワナベ古墳造出裾周辺採集の埴輪

**はじめに**　ウワナベ古墳は佐紀古墳群東群を代表する古墳時代中期の巨大前方後円墳で、奈文研は1969年度の平城宮第60次調査において外堤の調査をおこない、外濠と外堤を巡る埴輪列の一部を検出した。埴輪列は鰭付円筒埴輪、円筒埴輪、蓋形埴輪を含み[1)]、円筒埴輪は川西編年Ⅳ期に位置づけられている[2)]。

『平城報告Ⅵ』ではこのほかに、周辺の分布調査により墳丘造出裾付近で採集した須恵器、土師器、土製品が報告されているが、これら土器類とともに採集したとみられる鰭付円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪の存在を確認した（図62）。土器類と同様、本来は造出上に配置・配列されたものとみてよく、造出における埴輪配置をうかがう上で重要であり、その概要を報告する。

**円筒埴輪**　１～８は鰭付円筒埴輪。鰭が胴部に遺存する個体は２・４に限られるが、いずれも鰭付円筒埴輪と目される。なお、３についてはＢ種ヨコハケのピッチが狭く器壁も薄いなど、他と異なる特徴を有しており、普通円筒の可能性もある。口縁部は端部が外方へ屈曲し張り出す形態で、最上段には三角形の透孔を穿つ（1・6）。胴部の透孔には三角形・長方形・円形ないし半円形が確認できる（1～5）。３を除き、焼成前の赤彩が明瞭に観察できる。外面調整は、一次調整をタテハケ、二次調整をヨコハケとするのが基本となるが、二次調整ヨコハケには静止痕が観察できるＢ種（1・2・3）と、静止痕が明瞭でないもの（4・5）もある。１・２・４・５のヨコハケは突帯間で複数回施されたとみえ、上下に重複関係が認められる。

鰭部片は７が口縁部に、８が突帯付近に取りつくもので、両面に赤彩を施す。いずれも赤彩塗布時の刷毛状工具による擦痕をよく残す。２・４の鰭の剥離面には、円筒部外面調整のヨコハケとともに縦方向の沈線が確認でき、２の沈線は複数条からなる。４ではこの沈線が突帯を貫通して円筒部にまで及んでおり、突帯を切断した後に鰭を付加する。

９・10は朝顔形埴輪。いずれも頸部の小片。赤彩の有無は判然としない。10は頸部外面側を擬口縁状に立ち上げ内傾面をつくったのち、口縁部を積み上げる。擬口縁部外面（頸部突帯の剥離面）には凹線が、擬口縁部内面には外面と対応する位置にある凹線と縦方向の刻み目が確認できる。９は頸部から口縁部を一体的に立ち上げる。

**形象埴輪**　11～15は家形埴輪とみられる[3)]。外面の磨滅が顕著だが、内外面をナデ、棟先などの端部を刀子状の工具により調整したものとみられる。明瞭な赤彩は確認できない。11～13は屋根部で軒先。いずれも内面に壁体部に対応するとみられる剥離面が確認できる。14は壁体部。天地不明瞭。15は床部。円形に剥離面が確認でき、円柱をもつ家となる。また、端面から上下面の外端部にかけても剝離面が確認でき、L字形の裾廻突帯が付くものと考えられる。この剝離面の上辺には刻み目を施す。11・12・15は粘土紐を束ねて粘土板とし、13は板状の粘土を重ねて粘土板とするものとみられる。

**おわりに**　ウワナベ古墳の造出にともなうと考えられる円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪について報告した。円筒埴輪は外堤で出土したものと同様相で、造出には外堤と同様の鰭付円筒埴輪が樹立されていたこと[4)]を追認できる。また、造出に家形埴輪が配置されたことがあきらかになり、ウワナベ古墳の埴輪配置について新たな知見を得ることができた。円柱をもつ家形埴輪の類品には、宮内庁所蔵のウワナベ古墳出土品[5)]や平城宮東院下層から出土したもの[6)]があり、その関連が注目される。

今後も、ウワナベ古墳を中心に佐紀古墳群東群出土埴輪の整理・研究を継続し、当該地域における埴輪生産体制の実態解明を目指したい。

本報告はJSPS科研費JP17K13574による成果の一部を含む。

**（大澤正吾）**

**註**

1）『平城報告Ⅵ』1975。
2）川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2、日本考古学会、1978。
3）11～13に線刻などの装飾が認められない点や15の端部剥離面の状態など、家形埴輪と断定するには躊躇する要素もみえるが、他に候補となる器種も見出し難いため、現状では家形埴輪と考えておくこととする。
4）土生田純之・清喜裕二・加藤一郎「宇和奈辺陵墓参考地採集の埴輪について」『書陵部紀要』57、宮内庁書陵部、2005。
5）宮内庁書陵部陵墓課編『出土品展示目録　埴輪Ⅳ』宮内庁書陵部、2003。
6）立木修「円柱を表現する家形埴輪」『考古学雑誌』67-2、日本考古学会、1981。

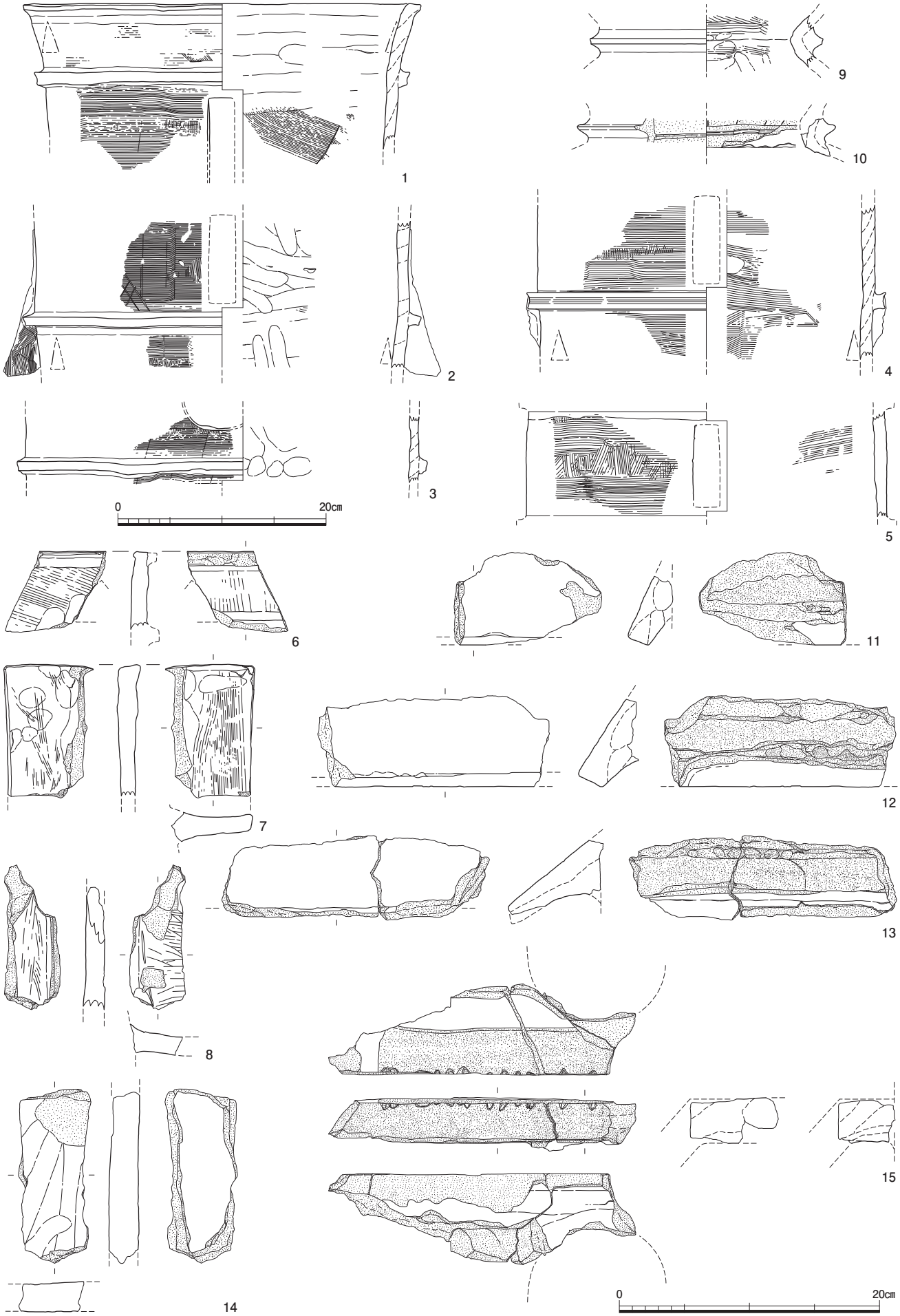


図62　ウワナベ古墳造出裾周辺採集埴輪　１：５（1～5・9・10）　１：４（6～8・11～15）